

令和 6 年 10 月 30 日  
丹後農業改良普及センター

## 温帯低気圧接近に伴う農作物・施設等の管理及び技術対策について

気象庁の予報によりますと、台風 21 号は今後、温帯低気圧に変わって本州に接近し、寒冷前線を刺激して、近畿地方では 11 月 2 日頃から警報級の豪雨の恐れがあります。

温帯低気圧の接近までに、以下の技術対策事項を参考として、事前の対策に備えていただくようお願いいたします。ただし、人命第一の観点から、温帯低気圧通過中に雷鳴が聞こえる間は絶対に作業を行わず、通過後も気象情報を確認した上でほ場周辺の安全に十分に注意し、状況が治まってからの事後対策作業をお願いします。

### 1 豆類

#### (1) 温帯低気圧通過前

- (ア) 豆類は湿害に弱いため、必ず排水路や排水口等の点検を行い滞水が生じないようにする。
- (イ) 黒大豆については、支柱・ビニールひも等による倒伏防止対策を行う。

#### (2) 温帯低気圧通過後

- (ア) 黒大豆では、倒伏して茎や莢が地面についていると腐敗するので、その部分を直ちに起こす。その後、腐敗防止のため、殺菌剤を散布する。
- (イ) 浸冠水した場合は速やかにほ場の排水を行う。

### 2 野菜・花き

#### (1) 温帯低気圧通過前

- (ア) ハウス栽培については、雨水がハウス内に流れ込まないように、ハウス周辺の排水溝の整備・点検を行う。
- (参考) 園芸ハウス台風対策マニュアル

<http://www.pref.kyoto.jp/nosan/news/documents/detailverall.pdf>

- (イ) 露地栽培については、ほ場が冠水しないよう、排水路を整備する。
- (ウ) 国営開発農地などの勾配のあるほ場では、エロージョンを防ぐため畝間に所々、土嚢袋を置き土壌の流出対策を行う。

#### (2) 温帯低気圧通過後

- (ア) 滞水している場合は、速やかにほ場の排水に努める。
- (イ) 液肥（500～1,000倍程度）を施用し、草勢の早期回復を図る。

- (ウ) 風雨による傷から病原菌が侵入し、病害が発生することが予想されるので、こまめに観察し、発生が確認された場合は発生初期に防除を行う。
- (エ) 収穫可能なものは速やかに収穫する。また、播種や移植の直後で発芽不良・立ち枯れが確認された場合は、可能ならば播き直しや植え直しをする。

### 3 果樹

#### (1) 台風通過前

- (ア) 防風ネットは柱の倒壊を防ぐため、控え線や杭を打って補強する。また、ネットの破れ目を補修しておく。
- (イ) 果樹棚は周囲線の留め金、アンカーからの控え線、吊り線を点検し、切れないように補強しておく。また、棚の揺れ止め補強を行っておく。ハウス（雨よけ含む）では、被覆が破れないように、押さえバンドで補強するとともに、ハウスごと飛ばないように、柱から控え線を張って補強しておく。
- (ウ) 棚利用の果樹では、枝の誘引をしっかりと、枝折れを防ぐ。
- (エ) 徒長枝等はできるだけ整理して風通しを良くしておく。
- (オ) 収穫できる果実は、できるだけ収穫する。
- (カ) 排水対策（明きょ等）を徹底する。
- (キ) 収穫終了したハウスやトンネルでは強風に煽られないようにビニールを外しておく。
- (ク) 病害発生が予想されるため、可能ならば銅剤等で温帯低気圧襲来前に予防防除を行う。

#### (2) 温帯低気圧通過後

- (ア) 落下した果実は、野生鳥獣を果樹園に呼び込まないよう園外に持ち出して処理する。
- (イ) 骨格枝が完全に折れた場合は、鋸等で折れ口をなめらかに切り戻して、癒合剤を塗布する。
- (ウ) 冠水した場合は、速やかな排水に努める。
- (エ) ブドウの雨よけ被覆が外れた場合は、修繕せずに片づける。

### 4 茶

#### (1) 温帯低気圧通過前

- (ア) 傾斜地茶園では、浸食防止のため土壌表面のマルチや周辺排水溝の整備を行う。
- (イ) 被覆棚では、ほどけた被覆資材が強風を受けて倒壊する恐れがあるため、被覆資材が支柱等へ確実に結束できているかを確認する。
- (ウ) 製茶工場では、雨水が浸入しないように十分に点検する。
- (エ) 病害発生が予想されるため、可能ならば銅剤等で襲来前の予防散布を行う。

(2) 温帯低気圧通過後

- (ア) 茶園が浸水した場合は、速やかに排水を図るとともに漂着物を除去する。
- (イ) 土砂が流入した場合は速やかに取り除く、また、表土が流亡している場合は早急に土入れを行う。
- (ウ) 強風等で茎葉が傷ついた場合は、輪斑病、炭そ病予防の殺菌剤を散布する。
- (エ) 製茶工場が浸水した後に、機械類に通電を再開する場合には、十分に乾燥させた後、使用マニュアル等により手順や注意事項を確認するとともに、漏電やショートに留意した対策を行うこと。また、状況によってはメーカーによる点検を受けるとともに、ヘルメットを着用して複数で作業するなど、安全を確保する。